

「解答解説編」について

解答 太字体で示しました。

出典 成立時期・編著者・特色などの作品の基本情報を掲載しました。

口語訳 原文に忠実な、分かり易い現代語訳を中心とした翻訳です。

設問解説 チャート・図解・コラムを盛り込み、正解への道筋を詳しく丁寧に解説し、自学自習にふさわしいものとしました。

重要語 重要な古文単語の確認・強化に利用してください。

読解のポイント 設問を解く際にポイントとなる箇所を取り上げました。

文法のチェック 古文読解に際して重要な文法力、受験に即した文法力の強化を利用してください。

難 とりわけ難度の高い設問に付しました。

67 60 52 46 39 32 24 16 10 4

学習院大学	法政大学
1 雨月物語	11 宇治拾遺物語
2 大和物語	12 浜松中納言物語
明治大学	関西学院大学
3 俊頼龍脳	13 日本永代蔵
4 木幡の時雨	14 蝋蛉日記
青山学院大学	関西大学
5 関の秋風	15 更級日記
6 源氏物語	16 保元物語
立教大学	同志社大学
7 発心集	17 松陰中納言
8 源氏物語	18 うたたね
中央大学	立命館大学
9 とばすがたり	19 筑波問答
10 宇津保物語	20 松浦宮物語

146 138 131 124 113 104 95 88 81 74

目次

1 雨月物語

学習院大学 経済

解 答

- (一) 1 ≡ もと 2 ≡ ふすま 3 ≡ もだ 4 ≡ なお
(二) ア ≡ 3 イ ≡ 2 ウ ≡ 1
(三) 1
(四) A ≡ 2 B ≡ 1 D ≡ 4 E ≡ 2
(五) 3 (六) 4 (七) 3

出 典

『雨月物語』。江戸時代中期に成立した読本。作者は上田秋成。中国の怪異小説に取材した九編の短編小説を収め、雅文に漢語を交えた格調の高い文体で書かれている。本文はこのうちの『菊花の約』の一節。上田秋成には他に『春雨物語』『胆大小心録』『痴癡談』『藤簾冊子』などの作品がある。

口語訳

播磨の国加古の宿場に、丈部左門という儒者がいた。貧しくても精神的に豊かな生活に満足して、日夜親しむ書物以外は全て家財や道具類の多いのを煩わしく思つて置かなかつた。年老いた母がいた。孟子の母の節操に劣らず、普段は糸を紡ぎ機を織ることを仕事として、左門の志を支えていた。その(=)

て、「疫病は人を損なうと聞きますので、家の召し使いたちも決してあの部屋には行かせません。(あなたも)立ち寄つてお体を損ないなさつてはいけません」。

(これを聞いて)左門は笑つて言つた。「人の生死は天命によります。(天命でなければ)どのような病気が人にうつるでしょうか(=決してうつりはしません)。それら(=「疫病は人を損なう」などの言葉)は、愚かな俗人の言葉であつて、私どもは信じません」と言つて、戸を押し開けて(病人の部屋に入つたが、その病人を見ると、主人が言つたのと違わず、並々の人ではないようだが、病氣が深刻な様子で、顔色は黄ばみ、肌は黒ずんで痩せ、古い布団の上でもがき伏している。その人は人懐かしい様子で左門を見て、「湯を一杯お与えください」と言う。左門は近くに寄つて、「あなたは心配なさらなくてよい。必ず(私が)お救い申し上げよう」と言つて、主人と相談して、薬を選び、自分で薬の処方の仕方を考え、自分で(薬を)煎じて与えては、さらに粥を(食べるよう)勧めて、看病することは兄弟のよう(に細やか)で、本当に捨ててはおけないと、左門は(その人を)いざめて(励まし)、「元気

左門の)妹である者は、同じ里の佐用氏に嫁いでいた。この佐用氏の家はたいそう裕福で栄えていたが、丈部母子の賢明な人柄を尊んで、(その家の)娘を嫁として迎えて親戚となり、折々何かにかこつけては物を贈つてくるのだが、(左門が)「日常生活のこととて他人の世話になろうか(=いや、なるまい)」と言つて、決して受け取ることをしなかつた。

ある日、左門が、同じ里の某氏のもとを訪れて、昔や今の話

をして興がのつてゐる時に、壁を隔てて(隣室から)人の苦し

む声がたいそう痛ましく聞こえてきたので、(左門が)主人に尋ねると、主人が答えて言う。「こより西の方の國の人と思

われますが、連れに遅れたと(=)ことで一夜の宿を求められた時、武家の風格があつて卑しくない(人柄)と思いましての

で、お泊め申し上げたのですが、その夜悪性の發熱がひどくて、起き伏しも自分では思うよにならない(状態である)のが、気の毒なので三日四日は(そのまま)過ごしましたが、ど

この人ともはつきりしないので、私(=主人)も思いがけない間違いをし(たと思つて)、当惑しております」と言う。左門は(これを)聞いて、「気の毒な話で(ござります)。主人が心

穏やかでないのももつともなことであります。が、病氣で苦しんでいる人は知る人もいない旅の身の上でこのような病氣を患

いなさるのは、とりわけつらいお気持ちでいらっしゃるだろう。その様子を看てあげたい」と言うのを、主人は押し留め

日数があります。その期間を過ぎてしまえば命に別状はありません。私が毎日参上してお仕え申し上げよう」と、誠実に約束して、気持ちをこめて看病するうちに、病氣もだんだんよくなつて気持ちがさっぱりしたように思われたので、(その武士は)主人にも丁重にお礼の言葉を言い、左門の陰徳(=隠れた善行)を尊んで、その(=左門の)仕事をも尋ね、自分の身上なども語つて言う。

設問解説

(一) 1 「許」は、「何某が許に訪ひて」という文脈であるから、人のいる所の意で、「もと」と読むのがふさわしい。

2 「衾」は、布団のことで、「ふすま」と読む。

3 「悶え」は、もがき苦しむ、という意味を表すや行下二段活用動詞「悶ゆ」の連用形で、「もだ(え)」と読む。

4 「猶」は、継続や添加の意味を表す副詞で、「なお」と読む。歴史的仮名遣いでは「なほ」と示す。

重要語

「許」の主な読み方と意味

- ① 「ゆる(す)」：認め、受け入れる。解放する。
② 「もと」：人のいる所。住まい。

(二) 「に」の品詞を識別する。前後の語のつながりや活用の有

無に注意して、適切な用法を判断する。

ア 「に」は、体言「伴ひ（連れ）」に付いて、「後れし（遅れた）」という動作の対象を示す格助詞。正解は3。

イ 直前に体言「よし」があり、接続助詞「て」が付いていいる。「に」は、「に+て」で「…デアツテ」と訳すことができる、断定の助動詞「なり」の連用形。正解は2。

ウ 「に」は、誠実な様子を表す形容動詞「実やかなり」の連用形「実やかに」の活用語尾である。正解は1。

文法のチェック

「に」の識別

- ① 格助詞：体言・連体形に付いて、文節の関係を示す。
- ② 接続助詞：連体形に付いて、前後の接続関係を示す。
- ③ 完了の助動詞「ぬ」の連用形：連用形に付く。
例 塵灰となりにき。（塵灰となってしまった。）
- ④ 断定の助動詞「なり」の連用形：体言・連体形に付く。「に+助詞+あり」の形でよく用いられる。
例 月の都の人にて、（月の都の人であつて。）
- ⑤ ナリ活用の形容動詞の連用形の活用語尾
例 あはれに（あはれなり） 静かに（静かなり）
- ⑥ ナ行変格活用動詞の連用形の活用語尾

死に・去に（往に）

⑦ 格助詞「にて」の一部

(三) 空欄は左門の会話文の中にあることに注意し、場面の様子から、空欄を含む一文で左門が何を言いたいのかを考えよう。

主人から病気の旅人の話を聞いて、気の毒に思った。

読解のポイント

「そのやう（様子）をも看 X 」（10ℓ）

主人公が止めるのも聞かずに病人の部屋に入つて行き、看護する。=自分で病人の様子を見てやろうとする。

- 1 「ばや」は、「…タイ」という動作主体の希望を表す、未然形接続の終助詞。自分が看たい、という意味になるので適切と判断できる。「看」は「み／み／みる／みる／みれ／みよ」と活用する上一段活用の動詞で、ここは未然形の「み」+「ばや」と考えることができる。
- 2 「せむ」は、空欄に入れると「看せむ」となり、使役動詞「看す」の未然形+「む」で、誰かに看せよう、という意味になるので、文脈に合わない。
- 3 「けむ」は、過去推量の助動詞で連用形に付く。「看」を

「看る」の連用形と考えれば、「み」+「けむ」で形の上で整合するが、看たのだろう、では文脈に合わない。

4 「侍る」は、丁寧の補助動詞「侍り」の連体形。係り結びなどはないから、通常の文末の形として不適切。また、

看ます、では、左門の気持ちの表現として十分でない。

(四) 古語としての用法に注意して、文脈に合うものを選ぶ。

A 「いとほしさ」は、形容詞「いとほし」に、接尾語の「さ」が付いて名詞化したもの。「いとほし」には、相手を気の毒に思う意と、自分がつらく思うという意味があるが、ここは苦しんでいる病人に対する主人の気持ちであるから、前者の意どとののが適切である。正解は2である。

B 「さる事」の「さる」は連体詞で、「さ+ある」のつまつた形。もともとは、そのような、という意味を表すが、しかるべき、もつともな、当然の、という意味でも用いられる。「こ」は左門が主人の気持ちを、心配するのももつともなことだが、と推し量っている文脈である。正解は1。

D 「方を案じ」の「方」は、「はう（ホウ）」と読み、薬などの調合や処方の意味で用いられることが多い。ここは「薬をえらみ（選び）」に続く内容であるから、文脈的にも4の処方と考えるのが適切である。「案じ」は、工夫する、心配する、考える、などの意味があるので、その点では1・3も後半は悪くないが、「方」の解釈が正しくない。

(五)

重要語

「いとほし」の意味

①かわいそだ。氣の毒だ。

②かわいい。いじらしい。③嫌だ。困る。

「さる」の意味

①そのような。そんな。②もつともな。当然の。

③かなりな。たいした。④（連体詞の）ある。

「方」の意味

①香や薬を調合する方法。処方。

②医術・天文学などの道。③四角いこと。

E 「同胞」は、「はらから」と読み、もともとは同じ母から生まれた親族を指す。兄弟姉妹のこと。左門は病人を、血を分けた兄弟のように親身になつて看護したのである。2が正解。

引用で、「しせい、めいあり」と読み、直訳すると、死と生には天命がある、となる。人間の生き死には天が定めたものであり、それ以外のことによるのではない、という意味である。知つていれば高度な知識問題とも言えるが、知らない場合は、前後の文脈から判断することが必要になる。

まず、この言葉は、直前の主人の言葉を受けて左門が答え

たものであることに注意して、主人が何を言つたのかを把握する。さらに、続く左門の会話文の内容を吟味して、主人に對してどのようなことを言つてゐるのかを考えてみよう。

読解のポイント

主人の考え方＝「癌病は人を過つ」

・家の召し使いたちも病人の部屋には行かせない。

・（あなたも）立ち寄つて身を損ないなさるな。

→『俗言を根拠に左門を引き止める』

左門の考え方＝「死生命あり」

・「命」でなければ、どんな病気も人にうつらない。

・「これら（＝癌病は人を過つ）」は俗人の言葉で、わたしは信じない。

→『主人の考え方を否定して病人の部屋に行く』

左門の言う「これら」が、主人の言う「癌病は人を過つ」を指し、さらにそれが「愚俗のことば」として避けられることを読み取る。そこから「死生命あり」とは、人の考えの及ばない、もつと大きな定めのようなものを意味していることを推察したい。主人は「癌病（疫病）」が「人を過つ（人を損なう）」と言うが、人を過つのは「命（天命・天から定められた寿命）」によるのだということである。

このような対比を踏まえて選択肢を見ると、1・2・4は

を送つていたとは本文に書かれていない。

3 × 「助けたらお礼をもらえるかもしれないと思った」

丈部左門は、何某の家で病氣の旅人に会い、主人が止めのも聞かずに看病してやつたが、それは「病苦の人はしるべなき旅の空にこの疾（やまい）を憂ひ給ふは、わきて胸窮しくおはすべし」（10^レ）と本文にあるように、旅の途中で病氣になつた病人の苦しみを思いやつてのことであつて、「お礼」をもらおうとしてのことではない。

4 ○ 本文後半の流れをたどり、内容を確認しよう。

読解のポイント

I 旅人の病状（主人の説明）

「その夜邪熱劇しく起臥も自らはまかせられぬ」

「癌病は人を過つ物と聞ゆるから」

↓病人が伝染病であると断言はしていない。選択肢

の「伝染病かもしけなかつた」：○

II 病氣の経過（左門と病人の様子）

・左門「自ら方を案じ、自ら煮てあたへつも、猶弱

をすすめて、病を看こと同胞のごとく」

→選択肢の「かいがいしく看病した」：○

・病人「病漸減じて心地清しくおぼえければ」

→選択肢の「病氣は快方に向かつた」：○

どれも「死生命あり」を「死、生命あり」と読んで解釈した間違いで、そもそも主人の考え方と対応しない内容である。主人は、病気がうつって身を損なうことを心配しているのであって、死んだ後のことと心配しているわけではないから、死後のことで反論している1・2・4は全て誤り。文脈に即して考えることが大事である。3が正解である。

(六) 内容合致問題は、本文の該当する箇所と照合し、誤りを含むものを消去する。一つ一つ丁寧に考えてみよう。

1 × 「定期的に訪ねて行つて」「話を聞いて報酬を得ていた」丈部左門は、「清貧」を大事にし、妹の嫁ぎ先からの贈り物も「口腹の為に人を累さんや（日常生活のことでの世話にはなるまい）」（4^レ）と言つて受け取らなかつたのであるから、同じ里の人から「報酬を得ていた」とは考えられない。「人々を定期的に訪ねて行つて」も本文に述べられない。

2 × 「妹の嫁ぎ先から金銭の援助を得ていた」「読書三昧の日々を送る」丈部左門は、妹の嫁ぎ先から物を贈られても受け取らなかつたのであるから「金銭の援助を得ていた」は誤り。左門の志を支えていたのは「常に紡績を事とし」（2^レ）ていた老母である。また、左門は「清貧」を大切にし、「書」に親しんではいたが、だからといって「読書三昧の日々」

正解と思える選択肢でも、自分の勝手な思い込みにすぎない場合があるので、必ず本文に根拠を求めて解答することが大切である。特に表現の言い換えがある場合は、早合点せず、そのように言い換えてよいかどうかをよく吟味して確定するようにしよう。

題(七) 選択肢には古文では見かけない人物も交じつていて、少し難しく感じられたかもしれないが、上田秋成が江戸時代中期に活躍した読本の作家であることは文学史の知識として知つていなくてはならない。それを手がかりに、江戸時代の作家は誰かを考えてみよう。正解は3「与謝蕪村」である。それぞれの作家の活動した時代と代表作は以下の通り。

1 吉田兼好：兼好法師。鎌倉時代後期の人で、隨筆『徒然草』の筆者である。

2 仮名垣魯文：明治時代初期に活躍した作家で、江戸の伝統を受け継いだ「戯作（江戸後期の通俗的な読み物）」の作者として知られる。代表作に『西洋道中膝栗毛』『安愚樂鍋』がある。

3 与謝蕪村：室町時代に活躍した連歌師で、連歌の完成者として知られる。代表作に、連歌集『水無瀬三吟百韻』『新撰菟玖波集』がある。